

## §15. 補遺

次の命題は、例 7.9 の最後の方、および、補題 8.5 の証明で使われている。

**命題 15.1** 体  $K$  の乗法群  $K^\times$  の有限部分群は巡回群である。

**証明**  $A$  を  $K^\times$  の有限部分群とし、 $A$  に属する位数最大の元  $a$  をひとつとる。 $a$  で生成される巡回群  $\langle a \rangle$  が  $A$  に一致することを確かめればよい。そこで、 $\langle a \rangle$  に属さない  $b \in A$  が存在するとして矛盾を導く。 $a, b$  の位数をそれぞれ  $m, n$  とする。いま、素数  $p$  について

$$m = p^e m', \quad n = p^f n', \quad \text{ただし, } p \text{ は } m' n' \text{ を割り切らない}$$

とすると、 $a^{p^e}, b^{p^f}$  の位数はそれぞれ  $m', p^f$  でこれらは互いに素だから、積  $a^{p^e} b^{p^f}$  の位数は  $p^f m'$  である。よって、 $m$  の最大性より

$$p^f m' \leq m = p^e m', \quad \therefore f \leq e$$

となる。これが任意の素数  $p$  について成り立つから、 $m$  は  $n$  の倍数であることがわかる。とくに  $b^m = 1$  であり、 $m + 1$  個の元

$$b, 1, a, a^2, \dots, a^{m-1} \in K^\times$$

はすべて多項式  $X^m - 1$  の根となるが、 $m$  次式は  $K$  において  $m$  個より多くの根をもたないから矛盾である。□

次に、やり残してあった補題の証明を与える。

**補題 15.2** (補題 8.9 再掲) 体  $K$  上代数的である  $\alpha, \beta$  が、 $\beta \in K(\alpha)$  をみたすならば、

$$|\text{Conj}(\alpha, K)| = |\text{Conj}(\alpha, K(\beta))| |\text{Conj}(\beta, K)|$$

が成り立つ。

**証明** ふたつの写像

$$\begin{aligned} F : \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K) &\longrightarrow \text{Conj}(\alpha, K) \\ G : \text{Conj}(\alpha, K) &\longrightarrow \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K) \end{aligned}$$

を定義し、それらが互いに逆写像であること、すなわち  $F \circ G$  と  $G \circ F$  がそれぞれ恒等写像であることを確かめればよい。そのために、まず  $\delta \in \text{Conj}(\beta, K)$  に対して、定理 6.11

より,  $\sigma(\beta) = \delta$  をみたす  $\sigma \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  が存在することに注意する. このような  $\sigma$  を各  $\delta$  に対して 1 つずつ選んで固定し  $\sigma_\delta$  と表すことにする;

$$\sigma_\delta \in \text{Aut}(\overline{K}/K), \quad \sigma_\delta(\beta) = \delta \in \text{Conj}(\beta, K).$$

(1)  $F$  の定義:  $\gamma \in \text{Conj}(\alpha, K(\beta))$  ならば,  $\gamma$  と  $\alpha$  は  $K(\beta)$  上共役であるから,  $K$  上でもちろん共役, よって  $\text{Conj}(\gamma, K) = \text{Conj}(\alpha, K)$  が成り立つ. さらに,  $\delta \in \text{Conj}(\beta, K)$  に対して,  $\sigma_\delta \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  が上のようにして定まり,  $\sigma_\delta(\gamma) \in \text{Conj}(\gamma, K) = \text{Conj}(\alpha, K)$  であるから,

$$F : \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K) \longrightarrow \text{Conj}(\alpha, K), \quad (\gamma, \delta) \mapsto \sigma_\delta(\gamma)$$

が定義できる.

(2)  $G$  の定義:  $\varepsilon \in \text{Conj}(\alpha, K)$  に対して定理 6.11 を適用すれば,  $\tau(\alpha) = \varepsilon$  をみたす  $\tau \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  が存在する. このとき  $\tau(\beta)$  の値は  $\tau$  の選び方によらず  $\varepsilon$  のみから定まる (実際,  $\tau' \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  も  $\tau'(\alpha) = \varepsilon$  をみたすならば,  $(\tau'^{-1} \circ \tau')(\alpha) = \alpha$  だから,  $\tau'^{-1} \circ \tau'$  は  $K(\alpha)$  上で恒等写像であり, さらに  $\beta \in K(\alpha)$  だから,  $(\tau'^{-1} \circ \tau')(\beta) = \beta$  すなわち  $\tau'(\beta) = \tau(\beta)$  を得る). また,  $\tau(\beta) \in \text{Conj}(\beta, K)$  に注意すれば,  $\sigma_{\tau(\beta)} \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  が  $\varepsilon$  のみから定まることもわかる. ここで, 上の  $\sigma_\delta$  の定義から  $\sigma_{\tau(\beta)}(\beta) = \tau(\beta)$ , すなわち  $\sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\tau(\beta)) = \beta$  だから,  $\sigma_{\tau(\beta)}^{-1} \circ \tau \in \text{Aut}(\overline{K}/K(\beta))$ . よって

$$\sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\varepsilon) = (\sigma_{\tau(\beta)}^{-1} \circ \tau)(\alpha) \in \text{Conj}(\alpha, K(\beta))$$

であり

$$G : \text{Conj}(\alpha, K) \longrightarrow \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K), \quad \varepsilon \mapsto (\sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\varepsilon), \tau(\beta))$$

が定義される.

(3)  $F \circ G$  が恒等写像であることの証明:  $\varepsilon \in \text{Conj}(\alpha, K)$  に対して,  $\tau(\alpha) = \varepsilon$  をみたす  $\tau \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  をとると

$$F(G(\varepsilon)) = F(\sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\varepsilon), \tau(\beta)) = \sigma_{\tau(\beta)}(\sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\varepsilon)) = \varepsilon$$

よって  $F \circ G$  は  $\text{Conj}(\alpha, K)$  上の恒等写像である.

(4)  $G \circ F$  が恒等写像であることの証明:  $(\gamma, \delta) \in \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K)$  に対して,  $F(\gamma, \delta) = \sigma_\delta(\gamma)$  である. いま  $\gamma$  に対して,  $\rho(\alpha) = \gamma$  をみたす  $\rho \in \text{Aut}(\overline{K}/K(\beta))$  が存在する. この  $\rho$  を用いると,  $\sigma_\delta(\rho(\alpha)) = \sigma_\delta(\gamma)$  より,  $\tau(\alpha) = \sigma_\delta(\gamma)$  をみたす  $\tau \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  として  $\tau = \sigma_\delta \circ \rho$  をとることができる. さらに  $\rho(\beta) = \beta$  なので,  $\tau(\beta) = \sigma_\delta(\rho(\beta)) = \sigma_\delta(\beta) = \delta$  となるから

$$G(F(\gamma, \delta)) = G(\sigma_\delta(\gamma)) = (\sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\sigma_\delta(\gamma)), \tau(\beta)) = (\sigma_\delta^{-1}(\sigma_\delta(\gamma)), \delta) = (\gamma, \delta)$$

よって  $G \circ F$  は  $\text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K)$  上の恒等写像である.  $\square$